



2017

龍谷大学 社会学部

社会共生実習 活動報告書



発行：2017年度 龍谷大学社会共生実習運営委員会

2018/3/31 発行

You,
Unlimited



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

内容

ごあいさつ.....	2
地域エンパワねっと	3
(1) 取り組みの趣旨・目的.....	3
(2) 2017年度の取り組みの紹介.....	4
(3) 2017年度の取り組みの成果と課題.....	4
りとるたんご大学 2017年度夏学期.....	7
(1) 取り組みの趣旨・目的.....	7
(2) 2017年度の取り組みの紹介.....	7
(3) 2017年度の取り組みの成果と課題.....	8
能美の里山生活史プロジェクト	9
(1) 取り組みの趣旨・目的.....	9
(2) 2017年度の取り組みの紹介.....	9
(3) 2017年度の取り組みの成果と課題.....	10
「子どもにやさしいまち」を作ろう	11
(1) 取り組みの趣旨・目的.....	11
(2) 2017年度の取り組みの紹介.....	11
(3) 2017年度の取り組みの成果と課題.....	12
学生による救命講習等を活かした地域防災活動／The First Aid	14
(1) 取り組みの趣旨・目的.....	14
(2) 2017年度の取り組みの紹介.....	14
(3) 2017年度の取り組みの成果と課題.....	14
雑創の森プレイスクール.....	16
(1) 取り組みの趣旨・目的.....	16
(2) 2017年度の取り組みの紹介.....	16
(3) 2017年度の取り組みの成果と課題.....	16
発信情報	18
WEB	18
マスコミ.....	18
その他の広報媒体.....	21

ご あ い さ つ

2017 年度 社会共生実習運営委員会

運営委員長 猪瀬 優理

「社会共生実習」は、社会学部全3学科が共同で運営する、社会学部の現場主義を体現する中核となる実習科目です。本実習では、学生たちが大学外部の様々な連携機関と協働して、社会の諸問題に対する理解を現場の中で深め、行動していくことを重視し、所属教員がそれぞれの専門知識やフィールド、人的ネットワークを生かしたオリジナルのプロジェクトを提供しています。社会学部の学生は所属学科を問わず希望するプロジェクトに参加できます。学生にとっては連携機関の方々との交流だけでなく、学科を超えた学生同士の交流も体験することになります。

今年度は「社会共生実習」としての幕開けとなりましたが、①「地域エンパワねっと（担当教員：猪瀬優理、築地達郎、筒井のり子、川中大輔）」、②「りとるたんご大学2017年度夏学期（担当教員：工藤保則）」、③「子どもにやさしいまちを作ろう（担当教員：田村公江）」、④「学生による救命講習等を活かした地域防災活動／The First Aid（担当教員：栗田修司）」、⑤「能美の里山生活史プロジェクト（担当教員：笠井賢紀）」、⑥「雑創の森プレイスクールでのプレイワーカー（担当教員：久保和之）」というバラエティにとんだ6つのプロジェクトが出揃いました。

本報告書では、各プロジェクトの1年間の活動とその成果を報告させていただきました。報告からは各プロジェクトにおける連携機関の皆さまから多大なるご協力をいただいたことが拝察されます。心より感謝を申し上げ、引き続きご高配いただきますようお願い申し上げます。

本報告書の内容を通して、現代社会が直面するさまざまな課題や問題を知っていただき、少しでも考えていただけるような機会となりましたら幸甚です。

2018年3月

地域エンパワねっと

担当教員：猪瀬優理、築地達郎、筒井のり子、川中大輔

(1) 取り組みの趣旨・目的

「地域エンパワねっと」(愛称は「大津エンパワねっと」)は2007年度、本学部が立地する大津における地域活性化、本学部に通学する学生の学びの質的向上、そして学部における教学改革の3つを目的として始まったものである。同年度、文部科学省の「現代GP」に採択され、学部所属の全学科(当時は4学科)の共同プロジェクトとして発足した。学生と地域住民が直接出会い、地域運営のための活動に向けて協力し合うことを通じて、相互にエンパワメント(潜在化した力を引き出すこと)され学び合う関係を創出することを目指した。

当時、本学部には所属する学科に関係なく受講できる科目すらなく、カリキュラムは学科ごとに閉じていた。また、地元地域という学外の教学資源を組織的・体系的に教育に導入することも行われていなかった。本プログラムが起点となり、2016年度カリキュラム改革において、多くの講義系科目の学科間の乗り入れと「社会共生実習」の実現につながったといえる。

本プログラムの最大の特徴は、「課題をあらかじめ設定しない」ということである。大学で取り込まれる社会連携型教育の多くは、教員が持つフィールドやネットワークの中であらかじめ設定された課題に学生が取り組むものがほとんどだが、本プロジェクトでは学生が地域住民と共に取り組むべき課題を見つけ出す。

これは学生にとっては極めて難易度の高いことである。そこで本プロジェクトでは、担当教員と地域住民のリーダー層(地元自治連合会会長など)とが定期的に(原則毎月1回)会合を開き、地域の動きや学生の動きを常に共有している。そこで共有された情報にもとづいて、学生の動きを適切にファシリテートするのである。

プログラムは原則として1年間で編成される。大津市の「瀬田東学区」と「中央地区」がフィールドとして協力してくれている。学生は、前半は地域における「課題」の発見、後半は発見した課題に対する「解決方策」の立案と実施が求められる。

学生にはまた、地域活動の成果をわかりやすくまとめて地域住民にフィードバックする「報告会」への参加と口頭報告および文書での報告が求められる。報告会は前期と後期の終盤に各1回開催されており、学生は地域住民の前でプレゼンテーションを行う。

地域活動を終えた学生は、学科ごとに指定された関連科目を単位修得することによって「龍谷大学まちづくりコーディネーター」の認定を受けることができる。

(2) 2017年度の取り組みの紹介

2017年度は10期生の学生計17名を迎え、4つのグループ（2地域に各2グループ）に分かれて活動を行った。瀬田東学区においては「子ども会活動の活性化」「子どもの防災意識向上」、中央地区においては「地域の魅力の（地元住民による）再発見」「地域の魅力の対外的発信」がテーマになった。

2016年度からの新カリキュラムの下で初めて開講された2017年度の授業は、他の社会共生実習プロジェクトに合わせるために割り当て単位数が旧カリキュラムと比べて半減した。これに伴い、実習指導のために設けられた授業時間も金曜日1・2講時の2コマから金曜日2講時のみの1コマに半減した。このため、前年度までに蓄積されてきた運営ノウハウの大幅な見直しを余儀なくされた。

具体的には、前半の冒頭に教員が引率して行ってきた現地視察活動（「まちあるき」と呼んでいる）を行うことが不可能になった。これについては、学生に地理的情報と「地元の人3名以上に会ってヒアリングをしてくる」という課題を与え、学生個々の空き時間を使って取り組ませるようにした。

また、やはり前半の冒頭の重要なイベントである「地域デビュー」の運営も困難に直面した。これは学生と地域のキーパーソンが相互に知り合い、地域課題を共に見つけ出すことができるような関係性を構築する上で極めて重要であるが、これも地域に出向いて開催することが不可能になった。今年度は地域の皆さんに来校いただき、90分間で慌ただしく交流することになった。

(3) 2017年度の取り組みの成果と課題

上述のように、学生にとっては、前年度までに比べて少ない情報と希薄な人間関係の中で、地域活動に取り組むことが求められることとなった。

学生たちはそうした制限要因をなんとか乗り越え、各グループとも一定の成果を挙げることができた。

具体的には以下のとおりである。

〔瀬田東学区〕

- ① 学区における子ども会活動の実態を、地域住民に代わって把握することに貢献した。
- ② 遊びを通じた防災教育のために、教育玩具の開発に成功した。

〔中央地区〕

- ① 旅行者などに宿場町の歴史に関心を持ってもらうために、旧東海道の情報マップを制作することになった（試作品を作成した）。
- ② 地域住民に地域の生活や仕事の歴史（ライフヒストリー）を取材し、新創刊された地元広報紙に記事を提供した。これにより、地元への関心を高めてもらった。

次年度に向けては、カリキュラム改革に伴って露呈した運用上の問題をチェックし、効

果的な運営方法を再構築する必要がある。このために、次年度の担当者会議を早めに繰り返し開催し、到達目標の再設定と前例に囚われない運営方法を模索することとしている。



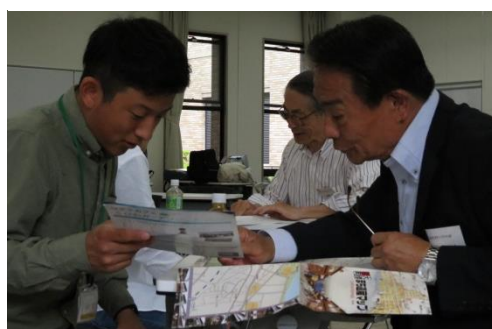
▲ はじめての授業



▲ まちあるき



▲ まちあるきのフィードバック



▲ 地域デビューにて情報収集



▲ 地域デビューにて情報収集



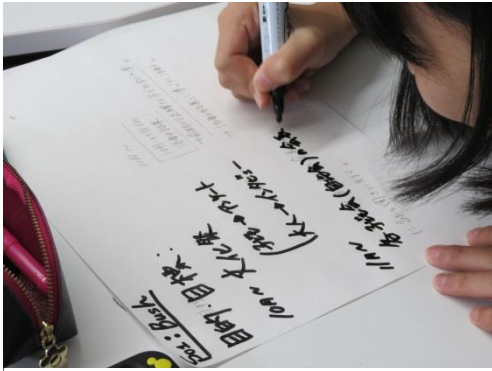
▲ チームでミーティング



▲ 前期報告会



▲ 前期報告会后 情報交換会



▲ 中間報告



▲ イベント準備



▲ イベント風景



▲ イベントの予行練習



▲ 防災グッズの手作りカード



▲ イベント風景



▲ 後期報告会に向けてミーティング



▲ 後期報告会 集合写真

りとるたんご大学 2017 年度夏学期

担当教員：工藤保則

(1) 取り組みの趣旨・目的

京丹後地域には高等教育機関が存在しない。高校卒業後、大学進学を希望する場合は、かならず地元を離れることになる。その事情を背景に、2015年3月にアーティスト集団「ロケット探偵団」丸山桂氏を中心にして、京丹後在住/関係の有志と、京丹後出身の大学4年生とによって「りとるたんご大学」というイベントが行われた。それは、出身学生が地元の方たちの前で「大学で学んだこと」を講義形式で発表するというものであった。出身学生、地元の方、ともに好評のうちに終了した。

本プロジェクトは「りとるたんご大学」を継ぐものとして企画したものであるが、それをそのまま再現することは目指さなかった。「りとるたんご大学」の成功をふまえながら、またそれを大いに参考としながら、受講生が丹後の人たちと共に考えながら新しいものを作ることを目指した。そうすることによって、受講生が企画力・運営力を身につけるとともに、「地方」「農山村」を（ある意味で）発見することを目的とした。

(2) 2017 年度の取り組みの紹介

今回のイベントの名称は、受講生との相談の結果「丹後つながる大学」とした。開催日は2017年8月6日（日）、開催場所は京丹後市の旧・郷小学校、講師陣は「現役大学教授」5人、「現役大学生教授」2人、「丹後人教授」3人、となった。

「丹後つながる大学」を開催するために、受講生は学内での毎週のミーティングに加えて、学外での活動も積極的に行った。京都市内在住の京丹後市出身者とのミーティングや、京丹後市でのミーティングやフィールドワークも行った。また京丹後市における事前のイベント準備だけでなく、宣伝活動にも関わった。

宣伝の一環として、チラシやポスター制作にも関与した。その際に考案した「私たちは、少し離れているから、つながることができる」というコピーや、「丹後と大学は少し離れている。大学は様々な人が集まる場所であり、先生も学生もみんな学ぶことの楽しさや喜びを共有できる場所です。丹後と都会。大人と子ども。悩んでいる人とワクワクしている人。考え方や立場が違うから、共に学び合うことができます。この日、丹後と大学が少し近づきます。そして、学びが人と人をつなぎます」という文章は、本プロジェクト・今回のイベントのキーコンセプトとなった。

イベント当日、受講生は来場者への対応やサポートスタッフへの対応など、運営側として全面的に関与した。

(3) 2017年度の取り組みの成果と課題

来場者はおよそ 60 人。それ以外に、イベントをサポートしてくれた方が約 10 人、講師（丹後つながる大学教授）として関わってくれた方が約 10 人、合計約 80 人が集うイベントとなった。来場者からはおおむねいい評価をいただいた。

受講生においては、運営側としての課題も多く残った。以下に、受講生自身が感じた課題を示す。

・「今回の共生実習でうまくいかなかったと感じたことは、情報発信である。私は、SNS を通して実習内容を掲載していたが、掲載し始めたのが遅かったので、それをもう少し早い段階から掲載してより多くの人に情報発信をする必要があったと感じた。また、Facebook だけでなく Twitter やブログといった様々な SNS をメンバーで担当を決めて情報発信をすることによって、できるだけ多くの人たちに私たちのイベントを知ってもらうことができたのではないかと考えた。加えて、高校生の参加率が悪かったことから、私たちが高校を訪問し、直接、情報発信をする機会を持てたらよかったと思った。」

・「振り返ってみると、あの時にこうしていればさらに良くなったかもしれないと後悔することがいくつかある。それは、自分がしたいことを上手に伝えられなかったことや、やりたいとがあってもどのようにすればいいのかわからずにできなかったことが影響していると考える。これは、自分がやりたいことは全て自分の力でしなくてはいけないと勘違いしていたからではないだろうか。このことから、もっとたくさんのコミュニケーションをとるべきだったのではないかと考える。そうすれば、私が 1 人で考えてもわからないことの解決策を知っている人が現れたかもしれない。こういうふうに、後から気付くことも多かった。」

・「うまく分担ができなかったこと、うまく情報共有ができなかったことが反省点である。共有することで、自分たちではできないことをほかの人に手伝ってもらったりすることができたと思う。お互いに共有すれば 1 人に負担がかかたりしなかったと思う。」

また、イベント開催までのスケジュール（何をいつまでに準備するのかなど）を細かく考えられなかったことも反省点である。もっと計画的にすれば当日慌てずに済んだのに、と思う。共同作業においては、（情報共有と共に）先のことを考えて行動することの大切さを知った。」

これらから、受講生は課題を具体的に捉えられていることがわかる。またその改善策を講じているものもある。そのこと（課題を具体的に捉えられている。改善策を講じている）は、プロジェクトの成果ともいえるだろう。

能美の里山生活史プロジェクト

担当教員：笠井賢紀

(1) 取り組みの趣旨・目的

里山は、手つかずの自然とは異なり、人の暮らしが自然と密接にかかわり、自然に影響を与えている場所である。そのため、里山での暮らしは都市部での暮らしと異なり、自然とどのように共生していくかが重要である。他方、里山では高齢化や少子化、あるいは過疎化といった社会的に「問題」とされる状況を他地域に先んじて受けている。

こうした状況において、今もなお里山で暮らしている人たちの、これまでの生活を丹念に聞き記すことを本実習では目指した。里山での暮らしを悲観的に見るのでもなく、逆に理想的に描くのでもなく、暮らしている人たちの日々を聞き取って記録し共有するという地道な作業である。

もちろん、里山での暮らしのアーカイブ（記録）としても位置付けられる。同時に、今後、日本の多くの地域が直面する上記のような状況の先進地のありかたを示すものとしても位置付けることが可能だろう。

本実習を通じて、受講生は自然と人とが共生する社会とは何か、そして人間関係が密な社会における共生とはどういったものかという複層的な「共生社会」像を、聞き取りの実習を通じて学ぶことが企図される。

(2) 2017年度取り組みの紹介

本年度は、石川県能美市仏大寺町という10余軒から構成される中山間の集落をフィールドとした。受講生は第1学期を通じて聞き取りの方法や能美市に関して学び、集落とアポイントメントを取った。その上で、7月に全受講生が集落を訪れ、3名の生活史を個別に聞き取った後にグループインタビューを行った。この第1回訪問では能美市役所の協力も得て、能美市内を周遊して地域の暮らしや文化についての理解を深めた。

夏休み中に録音データを文字に起こし、第2学期の前半で冊子を制作した。10月には完成した冊子を携えて集落を訪問した。この第2回訪問は集落が会場となって開催される「能美ほっこりまつり」の開催日に合わせており、受講生は冊子を住民や来場者に配布するとともに、まつりの運営を手伝った。

第2学期の後半は里地里山に関する学修に取り組んだ。また、次年度実習に向けて岐阜県垂井町に拠点をおくNPO法人「泉京・垂井」に協力を得て揖斐川流域の里地里山を視察した。

(3) 2017 年度の取り組みの成果と課題

石川県能美市仏大寺町の多くの住民と話したりまつりを作りあげたりすることで、単に「調査する者」と「調査される者」ではない交流と信頼関係の醸成が図れた。また、受講生たちは調査の方法や苦勞、成果物の作成手順、取材プロセス等につき実習を通じて体得した。また、住民やまつりの参加者に配布するための小冊子を制作した。小冊子は全 18 ページで、3 名の生活史や仏大寺の暮らしについて簡易にまとめたものである。受講生の感想も掲載されており、成果報告会向けに作成したポスターと合わせてみることで 1 年度間の取り組みを知ることができる。

1 年度目の実習として、十分に目標は達成できた。ただし、生活史の聞き取りという観点から評価すると、地域の歴史・文化・産業や里山での暮らしに関する基礎的な知識が欠如しているために「浅い」聞き取り・記述に終わっていることが残念である。また、生活史は語りそのものが重要であるが、小冊子を制作する際に受講生たちが「そのまま長く書いても誰も読まない」として過剰に「要約」してしまったことは、生活史と向き合う姿勢を身に付けられていなかったてんで反省すべき点である。

次年度は岐阜県揖斐川流域の里地里山にも訪れる予定であり、異なる里山どうしの共通点や違いに敏感に気付けるように学修を進めたい。



能美の里山生活史
仏大寺町の暮らし



▲小冊子の表紙



▲成果報告会ポスター

「子どもにやさしいまち」を作ろう

担当教員：田村公江

(1) 取り組みの趣旨・目的

「子どもにやさしいまち」とは、子どもの権利を満たすために積極的に取り組むまちのことである。本プロジェクトでは、子ども支援を手掛けるNPOや民間団体と連携して、「子どもにやさしいまち」を作るための学習と実践を行う。

(2) 2017年度の取り組みの紹介

①授業時間内の学習

1) 実習で得たことを共有するためのミーティング

ホワイトボードを使って、書き手と話し手双方のスキルが伸びるようなミーティングを行った。

2) 「5段落エッセーのフォーマット」で文章を書く

実習で得たことを自分の言葉でレポートにするために、「5段落エッセーのフォーマット」を使った。

3) 「若いアスリートのための権利の章典」(田村訳)を基に作成した「寸劇ワークショップ」

これは、スポーツの場面で子どもの権利が尊重されないために発生する事例をバッドエンディングのシナリオに作ったものを使うワークショップである(田村作成)。体罰や理不尽な指導が発生しがちな日本の部活について、問題を解決するための工夫を考えることができた。

4) 実習についての打ち合わせ等

このプロジェクトでは受入れ先が4か所あり、随時、様々なイベントが開催されている。授業時間を使ってどの実習に行くのかスケジュールを決め、事前学習を行った。

②実習受け入れ先での活動

子ども支援を行っているNPOや民間団体と連携して、子ども支援の現場について学んだ。連携先別に取り組みを紹介する。

1) 体罰をみんなで考えるネットワーク

この団体は2012年に発生した桜宮高校体罰事件を機に、研究者、スポーツ指導者、子育て支援団体、学校事故・事件(体罰、指導死など)の家族、一般市民などが集って作られた。この団体は年4回の定例会を開催して、子どもの人権と体罰問題に関する学習・啓発事業を行っている。学生たちは、定例会の運営スタッフとして参加した。

2) CAPセンター・JAPAN

この団体は子どもの権利の尊重、子どもへの暴力防止のために活動している。この団体が開催する講演会や講座に参加して子どもの権利についての理解を深めた。

3) はっぴいポケットみ・な・と (子ども情報研究センターが大阪市から受託して行っている子育てサロン)

大阪区港区の尻無川自治会館1階で、月・火・水・金・土曜日の10時～15時に開所されている育児サロンで補助スタッフとして活動した。

4) かんちゃんの小さな家

ここでは「かんちゃんホットルーム」というイベントが開催されている。これは、地域の子ども、保護者、お年寄りが集まって交流し、昼食を作って共に食べるというものである。参加する子どもたちは幼児から小学生であり、学生たちは子どもと遊んだり、料理作りや工作などを補助したりしながら、子どもをめぐる問題について理解を深めた。

③学生企画

組体操について大学生意識調査(アンケート)を行った。学生たちは、質問紙のワーディングやレイアウトについて話し合い、調査協力者への趣意書も作成した。瀬田キャンパスで開講されている授業の1つで、担当教員の許可を得た上で質問紙の配布と回収を行った。66票を回収した。

(3) 2017年度取り組みの成果と課題

①授業時間内の学習

1) 実習で得たことを共有するためのミーティング

オープニングクエストを使って話を聞く力、聞きながら書く力を伸ばすことができた。反復練習が必要なので、今後は毎行いたい。

2) 「5段落エッセーのフォーマット」で文章を書く

学生たちは「5段落エッセーのフォーマット」を難なく習得した。今後の課題としては、子ども支援に関する学術文献や記事等を読んで、内容を「5段落エッセーのフォーマット」を使ってまとめることである。

3) 「若いアスリートのための権利の章典」(田村訳)を基に作成した「寸劇ワークショップ」

1回しか行えなかったため、成果がどれくらい出たのかよくわからない。今後の課題は、学生たちがこのようなワークショップを自分たちのアイデアで改良すること、そして、学生たちがファシリテーターになって子どもたちにこのワークショップを行うことである。

4) 実習についての打ち合わせ等

打ち合わせや事前学習によって実習への目的意識を高めることができた。課題は、イベントに参加する予定の学生が体調不良などで欠席したり遅刻したりした場合の対応であ

る。

②実習受け入れ先での活動

1) 体罰をみんなで考えるネットワーク

様々な立場の大人が「聞く気」で講演を聞く姿に、学生たちは大きな刺激を受けた。体罰や指導死について、学生たちは深刻さを実感していなかった。しかし、遺族の話を聞くことによって初めて深刻さに気付くことができた。課題は、参加率を高めることである。

2) CAPセンター・JAPAN

この受け入れ先での実習も「座学」であるが、座学を基に実践的な学習ができたのが良かった。

課題は、講座を全て受講することができない学生もいたことである。学生のスケジュール調整が今後の課題である。

3) はっぴいポケットみ・な・と（子ども情報研究センターが大阪市から受託して行っている子育てサロン）

子育ての現実に触れることができたのは、大きな成果だった。課題は、経験することがメインになってしまっていて、実習の目的が不明確だったことである。受け入れ先に学生が決められた時間に行かなかったことがあり、連絡体制をもっと明確にしておくべきだった。

この受け入れ先では月間スケジュールに「パパデイ（お父さんの参加を促す日）」、「絵本の読み聞かせ」、「シングルマザーについて話を聞く日」なども盛り込まれている。こういう企画に合わせた事前学習をすることも、今後の課題である。

4) かんちゃんの小さな家

主催者から、学生たちが子どもの相手をしてくれるのでイベントの運営がとてもスムーズになった、と評価された。課題は、参加率を高めることである。この受け入れ先とは、地域との連携という点からも、今後、つながりを深めていきたい。

③学生企画

本格的なアンケートを一通り行うことができ、アンケート調査について自信がついた。担当教員も、アンケート調査の指導および支援の基礎を身につけることができた。課題は、役割分担を明確にすることである。

学生による救命講習等を活かした地域防災活動

The First Aid

担当教員：栗田修司

(1) 取り組みの趣旨・目的

大津市消防局等や市役所危機・防災課、消防団、寺院等の協力を得て、学生が救命救急の知識習得と、上級救命講習の受講を経て、普通救命講習の指導者として大津市内の防災訓練等で活躍し、さらに防災士の資格を目指しつつ地域防災を学び、防災訓練を盛り込んだ地域イベント等を計画・実施することで学生の発信力を高め地域との共生を図ることを目指す。

(2) 2017年度取り組みの紹介

大津市危機・防災対策課による講義、大津市消防局による講義・見学、大津市消防操作法訓練大会の見学、人と未来防災センターの見学、大津市夏期火災・防災訓練の見学、湖南広域消防局による講義・見学、大津市上級救命講習の受講、本学龍谷祭実行委員会普通救命講習への補助参加、本学瀬田学舎防火・防災訓練への補助参加、草津市渋川学区防災訓練への参加、草津市防災ミーティングへの参加、彦根市消防本部による講義・消防団の見学、彦根地方気象台による講義・見学、ミシガン州立大学連合日本センターの見学、彦根城の見学、草津市危機管理課 岩佐卓實氏の講演、地域防災支援に関する研究会における三上民喜氏の講演、以上のほかに学内での講義等を実施した。

(3) 2017年度の取り組みの成果と課題

2017年度は、特に「学生が救命救急の知識習得と、上級救命講習の受講を経て、普通救命講習の指導者として大津市内の防災訓練等で活躍」することで基礎的知識の取得を目指し、各種の行事参加や講演、見学を行った。

学生は、基礎知識を得るとともに、学内での討論も経ることで積極性も増し、また、レポートや報告書の作成により、課題の発見と、その解決のプロセスについても学び、これらの技術も向上したと考えられる。

課題としては受講生が2名であったという点で、学生間で多面的な見方をする部分に不足が見られたが、今後、各種の行事等に参加し、自主的な活動を組み立てる中で、多くの人々と関わるので、この面の成長も見られると考える。

▼大津市夏期火災・防災訓練 1



▼大津市夏期火災・防災訓練 2



▼心肺蘇生法



▼特別講義の講師の方と



雑創の森プレイスクール

担当教員：久保和之

(1) 取り組みの趣旨・目的

子どもたちをめぐる様々な問題は、もはや教育や心理的なアプローチだけではなく、社会全体の構造的な問題として考えなければならない現状があり、子どもたちの自発的活動の組織化や社会参画活動あるいは自然体験活動を支援しつつ、地域社会における子どもたちの居場所を築く力を持った「プレイワーカー」が必要とされている。近年、全国的に「冒険遊び場」と呼ばれるプレイパークが増えており、そこで活動するプレイリーダーの育成が急務の問題とされている。

本プロジェクトでは財団法人プレイスクール協会が運営する「雑創の森プレイスクール」において、子どもの自発的活動や支援をするプレイワーカーとして実習を行う。プレイスクールに赴き、スクールスタッフのアシスタントとして子どもに対するプログラムを実施していく。実習を通じて、子どもの活動を支援する技術や知識を身につけ、多様な現場で対応できる人材育成を目指すことを目的とする。

(2) 2017年度の取り組みの紹介

プレイワーカーとしての基礎的素養を身につけるために様々なプログラムを体験する。

まず、プレイスクールについての説明を受け、実際の施設を視察しながら、施設の場所や使い方などを学習した。また、実習に備えて活動の前にロープワークや救急法、焚火のつけ方、工具の使い方などを学んだ。毎週末に活動している「冒険クラブ」と「発明クラブ」に参加し、前期は上級生のアシスタントとして活動した。後期は、企画段階からプログラムに関わり、備品や用具の準備から実施運営を補助した。また、夏季休暇中に「サマーキャンプ」に帯同し、リーダーとして子どもたちと接し、子どもについての現状を学んだ。

(3) 2017年度の取り組みの成果と課題

前年度までに開講されていた「プレイワーク課程」関連科目の実績があったことから、社会共生実習としての活動は、比較的容易であった。活動の初期段階では、子どもの対応に不安があり、どうしてよいかわからずに受け身的な様子が見られたが、実習を進めていくうちに、様々な経験を積み、積極的に子どもと関われるようになった。

開講当初は男女6名の受講であったが、諸事情により男子学生4名による活動になった。受け入れ先の施設には、男児だけでなく女児もいることから、できるだけ男女の受講生が

いることが望ましい。また、受講人数によって実施できるプログラム数が変わってくるため、もう少し受講生が増えることが望まれる。



▲ ミーティング



▲ 発明クラブ



▲ 発明クラブ



▲ 冒険クラブ



▲ やんちゃキッズ



▲ お泊まり会の準備



▲ サマーキャンプ



▲ おやつタイム

発信情報

WEB

- ①龍谷大学社会学部「社会共生実習」公式ホームページ

URL : <http://www.soc.ryukoku.ac.jp/department/info/training/>

- ②龍谷大学入試情報サイト「You,Challenger 未来への挑戦」

Challenger28 として情報を提供

URL : <http://www.ryukoku.ac.jp/challenger/>

- ③「大津エンパワねっと」公式ホームページ

URL : <http://www.soc.ryukoku.ac.jp/gp/>

- ④「大津エンパワねっと」通信

URL : <http://www.soc.ryukoku.ac.jp/gp/reports/index.html>

マスコミ

< 前 期 >

- ①2017年(平成29年)7月17日(月) / 中日新聞(この記事は中日新聞の許諾を得て掲載しています)

【プロジェクト】学生による救命講習等を活かした地域防災活動/The First Aid

龍谷大学社会学部「大津市東大津町」の学生らが、消防訓練などを通して地域防災への理解を深めている。大津市を中心に行政や住民の活動に参加し、知識を身に付けるだけでなく、

地域防災の「力」に

取り組むのは、本年度から社会学部が実施する実習科目の一つで、地域防災を研究する栗田修司教授らが企画。阪神淡路大震災や東日本大震災では増え発生直後、消防などの行政機関が被災し、消火や救助活動が遅れたことから、自らを守る「自助」や地域で助け合う「共助」の重要性が指摘された。

栗田教授は、「この「共助」に注目。災害時に地域で活躍できる人材を育成しよう」と、実習の中に、防災や救命救急の基礎知識の習得のほか、応急手当や心肺蘇生法などを学ぶ「上級救命士」取得を目指すプログラムを組み入れた。

学生らは、四月から大津市消防局や市危機・防災課などを訪れ、消防官の管理体制や設備上や沿岸部の災害時に対応する消防艇などを見学。六月上旬には、大津市東大津町の市公設地方卸売市場で行われた消防訓練法訓練大会を視察し、消防員らの迅速で正確なポンプ操作を真剣に見守った。

途中、市消防団青山分団の団員から、防火水槽

龍谷大生が実習

資格取得も目指す

の資格や訓練など地域の安全を守るための活や講習をして、学生の関心内容を聞く機会もあつた。団員には大学生もおり、参加学生から「学校で資格取得は秋の大学祭で両立させているのを知り、大変な事だ」とか、「市のハザードマップをみると、青山学区は補助に当たるほか、地帯で災害の危険箇所」の防災プランもあつて、対策は分けてやえ、提案していく予定だ。将来は、市内の学生が担った。二面生の八木賢吾さん(21)は「昔からベルの高い救命講習を持つ消防団員になりたくて、実際に住民を避難させていた。同じ学生の立上げられる地域のリーダーが活躍する人材として期待されてきた」と

両立でアドバイスをもらえた。、尾崎勇人さん(21)は「地元でボイスカウト活動をしており、消防や救命について学んでいたが、今まで知らなかった消防団の裏面を知ることができた」と満足そうだった。

市内の消防・防災サークルの代表で、四回生の植本弘樹さん(23)も参加し「団員は、仕事をこなしながら訓練していて、和気あいあいとした雰囲気。消防団のイメージが変わった。サークルは現在メンバー三人のみだ

消防団員から活動内容を聞く、右から八木さんと尾崎さん—大津市東大津町の市公設地方卸売市場で

実際に必要な資格の取得も目指している。災害時、行政機関が被災して機能しない場合、地域で活躍する人材としても期待されてきた。

(横井弘美)

②2017年(平成29年)7月21日(金) / 北國新聞(この記事は北國新聞の許諾を得て掲載しています)

【プロジェクト】能美の里山生活史プロジェクト

まちづくりりに学生の力

能美・仏大寺町龍谷大生が風習調査

里山の自然が残る能美市・仏大寺町で、龍谷大による地域の風習、生活史の調査が行われる。町と同大は秋に開催される「能美ほっこりまつり」(北國新聞社後援)を通じて交流を重ねている。22日から2日間の日程で学生らが初の調査合宿に訪れ、来年2月までには結果をまとめる。今後のまちづくりに生かしてもらおうと町に調査報告の冊子を贈る。

龍谷大社会学部は実習科目として「能美の里山生活史プロジェクト」を新設した。合宿には2年生6人が参加し、地域住民の自宅を訪ね、仏大寺町ならではの風習や昔ながらの生活様式などを調べる。学生は10月の能美ほっこりまつりにも参加する。

キャンパスのある滋賀県

で能美と同じ「ほっこり」を冠した「東海道ほっこりまつり」が行われていることから、社会学部の笠井賢紀准教授研究室メンバーが5年前から能美のまつりにボランティアとして参加してきた縁がある。

仏大寺町は中山間地に位置する市内最小の集落で、調査を機に学生らとより交流を深めていきたい考えである。まつりを企画立案した民間団体「能美の里山ファン倶楽部」の畑中茂伸会長(68)は「住民が若者の意見や思いを聞く機会にもなり、今後のまちづくりに生かすことができる」と調査に期待を寄せた。

③2017年(平成29年)7月24日(月) / 北國新聞(この記事は北國新聞の許諾を得て掲載しています)

【プロジェクト】能美の里山生活史プロジェクト

里山暮らしに関心

能美 龍谷大生が聞き取り

龍谷大社会学部の学生6人は23日、能美市仏大寺町の民家を初めて訪問し、生活や昔から伝わる行事について聞き取り調査を行った。写真。同学部で今年度初めて開講した実習科目の「能美の里山生活史プロジェクト」の一環で、学生は、能美市の中山間地での暮らしを学んだ。

一行は22日に同市に到着し、仏大寺町の霊水「遣水観音霊水」が湧き出る山中や市史跡などを観光した。

滞在2日目となる23日は、学生が同町の住民に「夫婦のなれそめは何か」「イノシシなどの野生動物の対策はどうしているのか」などと質問した。

学生は今後、同町を会場に行われるイベント「能美ほっこりまつり」などに参加し、調査結果を冊子にまとめる。同大2年の玉田遼河さんは「地域愛が印象的だった。第三者の目から見た魅力をまちづくりに生かしてもらえたらうれしい」と話した。



④2017年(平成29年)8月7日(月) / 北國新聞(この記事は北國新聞の許諾を得て掲載しています)

【プロジェクト】能美の里山生活史プロジェクト



< 後 期 >

①2018年(平成30年)1月22日(月) / 読売新聞(この記事は読売新聞の許諾を得て掲載しています)

【プロジェクト】地域エンパワねっと



②2018年(平成30年)1月22日(月) / 中日新聞(この記事は中日新聞の許諾を得て掲載しています)
 【プロジェクト】地域エンパワねっと



その他の広報媒体

①2017(平成29)年9月11日発行 / 広報誌「龍谷」84号 / 発行元：龍谷大学
 【プロジェクト】「りとるたんご大学 2017年度夏学期」プロジェクト



③2018(平成30)年1月17日発行 / 「広報まちづくり中央」

／ 発行元：まちづくり中央(滋賀県大津市中央学区団体連絡協議会)

(この記事は滋賀県大津市中央学区団体連絡協議会の許諾を得て掲載しています)

【プロジェクト】地域エンパワねっと

「大津エンパワねっと」は、龍谷大学社会学部の学生と地域が協働してまちづくりに取り組むプログラムです。現在十期生が中央で活動しています。そのなかのグループ「なぎさふる」にこれまでの活動をレポートしてもらいます。テーマは「ライフヒストリー」。活動の狙い、お二人へのインタビューを紹介します。

聞かせてください 町家の暮らし あのころの街

大津 エンパワねっと グループ 「なぎさふる」 レポート

中嶋昭さん(九〇)は、築二百年の町家に住んでいらっしやいます。さっそく「町家の良いところは何か」とお尋ねすると「天井が高く、風通しの良い造りになっているのがいちです。夏は扇風機だけでも快適に通じます」と。冬の様子になると「裏庭に雪が積もった日はとても癒し深

中嶋さん宅

私たちの大津エンパワねっとでは、さまざま活動を経て中央に住まれている方々の生き方、生活様式こそが魅力でないかと考えました。私たちの活動は、みなさんにその魅力を発信することで「中央」という町に自信と誇りを持ってもらえるような内容を提供することです。

中央 ライフヒストリー





家に残る古文書に目を通す中嶋さん

「町屋ともな中央に長く暮らしてこられて、印象に残っている思い出はありますか」とお尋ねすると、「地蔵盆ですね。今でも思い出話をするほどです」。中嶋さんの町内は今でも結束が強く、祭りや行事があると、子供からお年寄りまでが大勢参加し、と

い景色になります。それはきれいなものです」と目を細めて話されます。反面「造りに冬場はこもる、暑いですがね」と町屋特有の短所も教えていただきました。町家に強い愛着心を抱く中嶋さん。その存在を幅広く知ってもらいたいと思っていらっしやるのが気になり、お尋ねすると、「今の町家は、外側が昔のままでも内側は現代的になってきています。やはり住み心地のことを考えると、やむをえないかもしれません。難しいですね」。中嶋さん宅も土間を部屋にしたり、足まわりを広くするなど内部を少し現代風にされています。

でも盛り上がるそうです。町の伝統行事をふり返る中嶋さんは、琵琶湖も昔から大好きだそうです。「気が重くなった時、琵琶湖を見るとスッキリする」とその魅力を語っておられました。

明治のこの地域には「魚久(うなぎゅう)」という大きな料亭がありました。近くには船があり、琵琶湖から船でやって来た客をおいしい料理でもてなした人気店でした。しかし、その料亭は無くなり跡地が区切られて、小売商が次々に出店しました。その一つがランプ屋でした。その店も興業し、昭和五年に祖母の引っ越しと同時に建てられたのが、現在の前岸さん宅です。魚久の冷蔵庫として使われていた地下室は、ランプ屋のガラス捨て場になっていました。それを家族が元の地下室に戻し、戦争中は防空壕になりました。しかし時

前岸さん宅

前岸妙子さんは昭和初期に建てられた町家(中央一丁目)にお住まいです。外見は昔ながらの町家には見えないので、町家暮らしという意識は少ないのですが、「譲渡する前岸さんに「家物語」を語っていただきました。

代とともに地下室も埋め、窓枠はアルミサッシに、二階和室はフローリングにと、外装・内装ともに昔の姿から次第に変わってきました。そのような改修工程を繰り返しましたが、「玄関上にある大和天井、やまとてんじまう」だけは残しました」と前岸さん。大工さんから「昔の人の知事が含まれていて価値のある造りだから」と伝えられ張り替えることができませんでした。これは天井板を外すと二階の家具などを上げ下げできる構造となっていて、大津の町家によく見られる技法だそうです。現在はフローリングが上にあるため使用できませんが、残したことを「良かった」と仰っていました。



大和天井を指し示す前岸さん

古くからの町家は風情があつて素晴らしいものですが、便利で快適であることも大切ですね。オリジナルの姿を失う改修であっても、あえて「町家の内側」にその証を一つだけ残した前岸さん宅は「粋な町家」なのかも知れません。

古くからの町家は風情があつて素晴らしいものですが、便利で快適であることも大切ですね。オリジナルの姿を失う改修であっても、あえて「町家の内側」にその証を一つだけ残した前岸さん宅は「粋な町家」なのかも知れません。